
ユーノ・スクライア外伝の外伝！

レオーネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユーノ・スクライア外伝の外伝！

【Nコード】

N0851X

【作者名】

レオーネ

【あらすじ】

ユーノ達の世界『ミッドチルダ』に偶然やってきた人達の物語。レオーネが書くユーノ・スクライア外伝の新しき外伝。

参戦作品介绍とお詫びとプロローグ

参加作品（変更有り）

ユーノ・スクライア外伝

デジモン×オリジナル、らき すた、ハヤテのごとく！、
ガンダムシリーズ×涼宮ハルヒちゃんの憂鬱、ちびまる子ちゃん

高町ヴィヴィオ外伝を見てくださった皆様、重要大事様、大変申し訳ありません！

高町ヴィヴィオ外伝は色々と失敗して、挫折してしまいました…

そこで、また一からやり直そうと考えました。

一度挫折してしまったユーノ・スクライア外伝の外伝作品をもう一度書きます！更新が遅くなるかもしれませんが、どうぞよろしくお願います！

プロローグ

ユーノ達が知らない地球でのことだった。

そこでの日本のあるゲームセンターでのことだった。

アルト「こなちゃん何のデジモン？」

こなた「あたしはアグモンだよ。アルト君は？」

アルト「俺はブイモン！」

つかさ「あーテリアモンだー」

かがみ「お！ガブモンね！みゆきは？」

みゆき「私はピヨモンです」

アルト「ナギは？」

ナギ「私はレナモンだ」

ハヤテ「僕はギルモンです」

この7人が何をしているかというと、新しく稼働される『デジモンオンライン』をするべく、デジモンペンデュラムを買っていたのだ。デジモンオンラインはペンデュラムを差し込んでゲームをするのでペンデュラムは必要なのだ。

アルト「早く行こう！」

かがみ「はいはい（笑）」

一同がデジモンオンラインをプレイする同じ頃、静岡では…

まる子「たまちゃんは何のモビルスーツだった？」

たまえ「私はブリッツガンダムだよ、まるちゃんは？」

まる子「あたしゃリックディアスだよ…はあ、あたしもガンダムタイプが良かったよ…」

まる子を初めとする3年4組のクラスメートは、デジモンと同じく

稼働された『ガンダム ドリームバーサス』をプレイすることに。
ガンダムドリームバーサスとはガンダムのオンラインゲームで、プレイした回数や勝利数によって、選べるモビルスーツが増えてくるというもの（最初は各作品の序盤に出ていた機体のみ）。

花輪くんは金持ちなので、アーケードの機器を1日貸し切りにできるので店に並ばずとも3年4組のクラスメートは皆でプレイすることが出来たのだ。

他の誰がどの機体に乗るかは次回から分かります。

同じく岐阜でも、涼宮ハルヒ率いるSOS団がガンダムをしていた。

ハルヒ「シャアザクかぁ、悪くないわね！キヨンは？」

キヨン「エクシアだ」

ハルヒ「エクシア！？キヨンの癖に生意気ね」

キヨン「悪いだよ！」

古泉「因みに僕デユナメスです。は長門さんは何の機体に？」

有希「デスサイズ」

みくる「このまるっこい機体ですかぁ？」

古泉「これは…カプルですね」

こうしてただゲームして遊んでいる者達だが、この後大変なことになる。

アルト「なんだ？」

ゲームを終えたアルト達の足元に魔方阵が現れた。

まる子達やSOS団も同じだった。

そして魔方阵が光を放ち、おさまった時にはそこにいた人間は誰一

人
い
な
か
っ
た。

たどり着くその場所は（前書き）

遅くなりましてすみません！

たどり着くその場所は

その時、アルトが初めて見たのはブイモンだった。

アルトは一度目を擦り、自分の頬をツネってみるが…

ブイモン「何やってんだ？」

アルト「ええええ！？」

突然ブイモンが喋り出した。

アルト「ブ、ブイモンだよな…」

ブイモン「そうだよ」

アルト「俺のデジモンの」

ブイモン「ああ」

アルト「何故にここへ？」

ブイモン「わかんねー」

アルト「だって、そもそもお前これの中に…」

アルトはデジモンペンデュラムを取りだそうとしたが、出てきたのは別の物だった。

スマートフォンだろうか…そんな形をして、色は水色。

アルト「これは一体…それに此処は」

周りを見渡すと、何か沢山のロッカーがある。

すると、誰かが近づいてくる音がした。

アルトは隠れそうな場所を探して、掃除用具入れを見つけ、ブイモンと共にそこに隠れた。

ブイモン「どうしたんだよアル…ん！」

ブイモンの口を塞いで用具入れから覗いてみる。
そこには、アルトの一つ下の女の子達（アルトから見てそう思えた）
が制服を脱いでいた。

アルト（！？）

そこでわかった、ここは日本ではない（生徒達の見ただ目でわかった）
こと、それと日本ではないどこかの学校であること、そしてその学
校の…

アルト（更衣室だとオオオオオオオオオ！？）

その頃

キヨン「……ど……」

キヨンは乗客船の中にいた。
頼みの綱である長門に電話したくても、電波がない場所にいるのか
通じない。

キヨン（ハルヒの奴、今度は何を望んだんだ？）

キヨンは自分の腕に付いている機械（のうけい）を見た。

画面が付いていて、白い体をした機械だった。
何気なく画面に触れてみると、そこからキヨンの前にモニターが現

れた。

また触れてみるとモニターが消えた。

何だったのか…

そう思っていた時だった。

？「ズバリ！貴方にお聞きしたいことがあります！」

メガネを掛けた変な喋り方をする少年に話しかけられた。

キョン「（なんだこいつ！？）な、なんだい？」

？「貴方が付けているそれは一体どういう物かご存知でしょうか？」

キョン「さ、さあな…」

？「では…この船は何処へ向かっているのでしょうか？気が付いたらこんな所に…」

キョン「おい、それ本当か！？」

キョンはメガネの子供と話した。

子供の名前は丸尾^{まるお}末男^{すえお}。

キョンと同じく、気が付いたらここにいて、キョンと同じ物を付けていた。

しかも、彼の此処にくる前の行動もキョンと同じだった。

丸尾「ズバリ！私達は迷子になったでしょう！」

？「へーイ、丸尾君じゃないか」

今度は茶色い髪、奇抜な髪型をした少年が現れた。

丸尾「おお！花輪君！」

丸尾曰く、この花輪という少年はかなりの金持ちだとか。

花輪「それより、この船なんだけど、クラナガンという場所に向かっているらしいんだ」

キヨン（クラナガン？なんだそれは？なんか面倒なことになりそうだな…）

まる子「疲れた…あたしゃもう歩けないよ」

つかさ「あの公園のベンチで休む？」

たまえ「そうしよ、まるちゃん」

まる子、たまえはクラナガンの街中に迷いこんで、同じ境遇の柊つかさと行動をとっている。

歩いてだけでも、自分達の知っている世界とは違うことがよく分かった。

テリアモン「まる子は体力ないな」

まる子「うるさいよ！はあ、ここが地球じゃないなんてあたしゃまだ信じられないよ」

たまえ「私も…」

？「つかささん？」

突然、誰かに声をかけられた。

つかさ「ん？ゆきちゃん!？」

みゆき「やつぱりつかささんでしたか！」

ピヨモン「みゆき、この人は？」

みゆき「私の友人の柊つかささんです」

みゆきはピヨモンを連れていた。

つかさ「ゆきちゃんもピヨモン連れてるんだ」

テリアモン「やつほ」

みゆき「まあ、つかささんですか！」

まる子「つかささん、この人は？」

つかさ「私の友達の」

みゆき「高良みゆきと申します」

それからつかさ達は雑談していた。

たまえ（あれ？何か忘れているような…）

チンピラ「までコラー！」

チンピラ2「逃がさねーぞ！」

みくる「ひえ」（泣）

ハヤテ「しつこい連中ですねー！」

一方、ハヤテとナギはチンピラ達に絡まれていたみくるを助けようと、連れて逃げていた。

路地裏

チンピラ「ここまでのようだなあ」

ハヤテ「お前達がだけどね」

チンピラ2「ああ!？」

「ファイアーボール!」

「狐葉楔!」

チンピラ「ぐわああああ!」

チンピラ2「ぎゃああああああ!」

ハヤテのギルモンのファイアーボールとナギのレナモンの狐葉楔が効いたのか、2人はピクリとも動かない。

ハヤテ「路地裏の方が見られないのですのでよかったですよ」

みくる「あのオ、助けて頂き、ありがとうございます。」

ナギ「礼にはおよばん」

ハヤテ「それより、ここは一体何処でしょうか?」

みくる「私にも解りません、気が付いたらこんな所に…」

アルト「行つたかな?」

女子達がい olmadığını確認して、ロッカーから出るアルト。
しかし…

「「「キヤーーーーー！！！！」」」

外から悲鳴が。

見てみるとそこには

クワガーモン「グワーー！」

サイクロモン「グオーー！」

コカトリモン「コケーー！」

デジモンが暴れていた。

アルト「どうなってんのこれ！？」

？「キヤー！誰ですか！？」

アルト「（やべ！）と、通りすがりのテイマーだ、よく覚えておけ！ブイモン！」

ブイモン「オツケー！」

アルトは嘘（あながち嘘ではないと思うけど）を言って臨戦体勢をとる。

一方、街ではモビルスーツやデジモンが暴れていた。

まる子「な、なんなのさあれは！？」

キートン(次回へつづく

戦闘くアルト編く（前書き）

お待たせしました！毎度更新が遅くてすみません（汗）

戦闘くアルト編く

アルト「さて、どうしようか…」

アルトは自分がデジモンカードを持っていることに気がついた。
アニメではカードをデジヴァイスにスラッシュする所があったが…
アルトはカードをデジヴァイス画面に当ててみた。

アルト「カードスキャン！モジャモン、骨骨ブーメラン！」
ブイモン「うおいりゃー！ー！」

ブイモンはカードスキャンで出てきた骨骨ブーメランをコカトリモンに投げた。

コカトリモン「コケー！？」

コカトリモンは反撃しようとしたが、ブーメランだけに戻ってくるのにも当たった。

ブーメランの二連撃によってコカトリモンを倒した。

アルト「おっしや！次！」

今度はサイクロモンが現れた。

サイクロモン「グワーーーー！！！」

サイクロモンの異様な片手が迫るも、ブイモンとアルトは無事避け

た。

アルト「カードスキャン！レオモン、獣王拳！」

ブイモン「うおおおおお！！！」

ドゴツ！！！！！！！！！！

サイクロモン「ゴワー！」

サイクロモンもバツタリと倒れ、消えていった。

アルト「んじゃ最後に…！？」

なんとクワガーマンは空を飛んで逃げていった。

アルトもそれを追いかける。

その先が中等部で、あの少女に出くわすとは知らずに…。

ヴィヴィオがいる中等部ではクワガーマンが来たことにより大パニックになっていた。

それだけじゃない。どこから来たのか、セーバードラモンやモリシエルモンが浸入してきた。

逃げ回る生徒たちを襲う三体のデジモン。

駆けつけて、それを見たアルトは絶句した。

成熟期がまた三体も…

そんな時だった。

？「おいアルトくん！」

聞き覚えのある声がして振り向いたら、そこには泉こなたと柊かがみがいた。

アルト「2人ともここから離れてー！」

こなた「その必要はないよ。アグモン」

かがみ「ガブモン！」

こなたのパートナー、アグモンとかがみのパートナー、ガブモンが現れた。

かがみ「ガブモンはセーバードラモンをお願い！」

こなた「じゃあアグモンはモリシエルモンでね」

アルト「ブイモンはクワガーモンを倒せ！」

「っ「おう！」「」

アルト達の指示に合わせてデジモン達が動く

「ブイモンヘッド！」

「ベビーフレイム！」

「プチファイアー！」

三体はそれぞれの技を出す、成熟期相手には効かない。

こなた「むー、効かないか…」

かがみ「どうするのよ！？」

？「あ、あの！」

かがみ「？」

？「進化とかしないんですか？」

こなた「おお！その手があった！」

アルト「でもできるかな？」

かがみ「！やってみるしかないみたい…」

アルト達が話している内にブイモン達が満身創痍になっていた。

アルト「ブイモーン！！」

その時だった。

アルト達のデジヴァイスが強く光った。

アルト「これは…」

こなた「進化フラグ来たーーーー」

「ブイモン進化！ブイドラモン！」

「アグモン進化！グレイモン！」

「ガブモン進化！ガルルモン！」

ブイドラモン「Vブレスアロー！」

グレイモン「メガフレーム！」

ガルルモン「フォックスファイアー！」

三体の必殺技はクワガーモン達を見事倒した。

アルト「ふー…勝てた…」

かがみ「一時はどうなるかと思ったわ」

こなた「それにしてもよく進化を知ってたね？」

こなたは少女に聞いた。

その時、こなたは気づいた。

こなた（あれ？この子ってまさか…）

？「はい、一度デジモンの事件が起きたので」

こなた「あの、君の名前は…」

？「高町ヴィヴィオです。ママは時空管理局のエースオブエースの高町なのはで、パパはユーノ・スクライアです」

こなた「な、なんですとーーーーー！！？」

その時のこなたの叫びは学校中に響いたという。

戦闘〜キヨン編〜（前書き）

また随分と遅くなりました！

本当に申し訳ありません！

そして今回もページ少なくてすみません！

戦闘〜キヨン編〜

船の中でキヨンが丸尾と花輪と共にゆっくり過ごしていた時だった。

突然船内に警報が響いた。これには皆ビックリしたが、その次にはアナウンスが聞こえた。

『乗客の皆様にお伝えします、アンノウンが船に近づいています。乗客の皆様は、中に入って下さい。繰り返します…』

と、言われても、客達はまだ困惑気味だった。

その時、ドン！と大きな音が鳴り、船が揺れた。

何処かが爆発したのか…それとも、アンノウンというものに攻撃を受けたのか。

乗客達はパニックに陥る。

『アンノウンが攻撃してきました、乗客の皆様は船の内部に避難してください』

キヨン「何にやられたんだ!？」

キヨンは窓の外を覗いた。

外にはロボットののような物が銃を持って、船に撃ち続けている。

乗客1「なんだあれは!？」

乗客2「ガジエツトか!？」

他に、外を見た乗客はそう言う。

キヨン（ガジェット？そいつがどんな奴か知らないが、あんたらの知ってる奴じゃないだろうよ…あれは…）

丸尾「ズバリ！モビルスーツでしょう！」

丸尾が突然割って入って来た。

キヨン「ビビらせんな！あと顔が近い！」

キヨンは丸尾の顔を遠ざける。

花輪「確かに…あれはガンダムSEEDに出てくるディンだったね」

花輪くんも、窓から奴らを覗いて言う。

しかし、なぜそんな物が…

その疑問は、次に現れる者を見た瞬間に頭の中から消えた。

キヨン「なんだありや！？」

花輪「人が空を飛んでる！！」

丸尾「ズバリ！あの人は誰でしょう！？」

丸尾は近くの乗客に聞いた。

乗客「時空管理局の魔導士さん達だよ、知らないのか！？」
キートン【当然である】

乗客「でもまあ、管理局が来たからもう安心…」

乗客2「いやまて！？管理局が押されているぞ！」

みると魔導士達はディンに落とされていく。

乗客「何故だ!?!」

乗客2「なあ、ガジェットが持つてるあれは質量兵器じゃねえのか!?!」

ミッドチルダでは、銃や火器といった物を使ったり作ったりするのは禁止されている。魔導士達がバリアジャケットで防げるのは魔法の攻撃のみ。

しかし、本当のマシガンやビームライフルだったらマジで管理局側が不利なので、今作は魔力で構成された弾やビームを撃つということにする。

まあ、不利だという事実は変わらないが…。

丸尾「ズバリ、またピンチでしょう!」

そんな時だった。

もの凄い速さでディンを破壊する魔導士がいた。

大きい鎌のような武器を持ち、黒いバリアジャケットを身に包んだ金髪の美しい女性だった。

フェイト視点

フェイト「シャーリー! 戦況はどうなっているの!?!」

フェイトはモビルスーツの襲撃を受けている船に向かって行った。

シャーリー「先に向かった空戦魔導士達が押されています。情報に

よると謎のガジェットは質量兵器らしき物を持っているそうです！
気を付けてください！」

フェイト「わかった！ありがとう！」フェイトはシャーリーとの通信を終えた時、モビルスーツ（フェイトから見たら謎のガジェットだが）と魔導士達の戦闘を目で確認できた。

フェイト「行くよ、バルディッシュー！」

バルディッシュ『了解！』（英語は面倒なのでこの作品では日本語）

フェイトは鎌と化したバルディッシュでディンを破壊していく。

フェイト「ホントに質量兵器を持ってる！？」

しかも後から後から次々と現れる。

出てくるのはディンに限らない。

ガンダム00に出てくるフラッグやイナクト、ガンダム に出てくるアッシマーもいた。

それも相当な数。

フェイト「どれだけ来るの！？」

フェイトはソニックフォームになって、敵を斬り落としていくが、アッシマーはフェイトの攻撃を避けていた。

（あの機体…他の奴とは違う…）

そう思いながらも、フェイトはプラズマサンダーでアッシマーを撃つ。

そんな時だった。

船から爆発音が聞こえて、フェイトはそちらに気を取られてしまった。

アッシマーはそれをチャンスと言わんばかりにビームライフルを撃ってくる。

フェイト「くっ…！」

ギリギリのところで避けるフェイト。

応援を呼んでみようか…そう思った時だった。

船に侵入したイナクトが押し返されて、ビームライフルを撃たれて爆発した。

イナクトを倒した相手を見た時、フェイトは驚愕した。フェイト「あれは…ガンダム!？」

（キヨン視点）

今度はフラッグ、イナクト、アッシマーもいた。

乗客「なんて数だよ…」

乗客達が不安の声をあげる。

キヨン「なんなんだよおい…！」

花輪「あの人、大丈夫かな？」

キヨン達も心配になっていく。

そんな時だった。

船内が爆発したかと思いきや、そこからイナクトが入ってきた。

「うわーーーーー!!」

「きゃーーーーー!!」

声を上げ、パニックになる乗客達。

キヨン「くそ！なんとか出来ねえのかよ!？」

その時だった。

キヨンは白い機械から出るモニターを見てみた。

そこには『エクシアをセットアップしますか?』と描いてあった。

キヨン（もうどうにでもなれー!）

キヨンはセットアップすることに決めた。

すると、キヨンの周りには突然現れた鎧があった。

そしてそれはしだいにキヨンの体に付いた。

次に武器が現れ、キヨンはそれを手に取った。

その時のキヨンの姿は

丸尾「ズバリ！ガンダムエクシアでしょう！」

キヨン「うおー！」

エクシアとなったキヨンは武器であるGNソードでイナクトを斬り、船から追い出す。

そしてGNソードをライフルモードに変えて、二発撃った。

それも受けたイナクトは爆発した。

その爆発に気付いたのか、金髪の魔導師がエクシアを見て、驚いた。

「あれは…ガンダム！？」

エクシアになったキヨンに気を取られているフェイト。

その隙に、アッシマーがビームライフルを撃ってくる。

フェイト「しまった！？」

キヨン「やらせるかよ！」

しかし、キヨンが間一髪でシールドで防いだ。

キヨン「大丈夫ですか？えーと…名前は？」

フェイト「え…あ！フェイト・T・ハラオウンです」

ガンダムを間近で見て一瞬ボーンとしたフェイト。

フェイト「さっきはありがとう…ガンダム君」

キヨン「今はそうですけど俺も人間なので…それよりもコイツらを」

キヨンが大量のMSを見た時だった。

？「ヘーイ、Mr・キヨン」

キヨンがいた船から、ガンダムタイプのMSが現れた。

キヨン「そのウイングガンダム…花輪か！？」

花輪「ビンゴ！僕らも白い機械をイジったら出来たのさ」

丸尾「ズバリ！私もいるでしょう！」

ウイングガンダムと化した花輪と、ド・ダイ改に乗ったガンダムマ
ークII（エウ・ゴ仕様）と化した丸尾も来た。

キヨン「全員であいつらを片付けるぞ！」

花輪「オツケー」

丸尾「了解です」フェイト「あ！ちょっと…」

フェイトは彼らを止めようとしたが、無理だった。

フェイト（あの子達にやらせる訳には行かない！）

そう思い、フェイトもMSを破壊しようとした時だった。

？「花輪くうくん！」

フェイト「！？」

花輪「！？」

どこから来たのか、ピンク色のティエレンと赤いザク（ド・ダイに乗って）が現れた。

そしてそのティエレンとシャアザクから発する声。

花輪はその声を聞いて背筋を凍らせた。

キヨンは「まさか…」と呟いた。

さて、ティエレンとシャアザクの正体が誰なのか読者の皆さんはもうお分かりだろうか？

花輪「み、みぎわさんかい…ベイビー？」

みぎわ「そうよー！会いたかったわー！」キヨン「ハルヒ？」

ハルヒ「よく分かったわねキヨン！てかまたエクシアなの！？」

みぎわは花輪に抱きつこうとしたが、花輪は「ヒッ！」と悲鳴をあげて避けた。

みぎわ「ああん！恥ずかしがらなくてもいいわよ」

花輪「や、やめてくれたまえー！」

キヨンとハルヒは口喧嘩をしていた。

ハルヒ「とーにーかーく！キヨンにエクシアは似合わないわ！ジムか旧ザクで充分よ」

キヨン「弱すぎるだろ！」

戦場であるはずなのに、緊張感を見せずに、らしくないことをする4人。

それを見てポカーンとするフェイト。

カオスな空気になっていた。

丸尾「ズバリ！そんなことしてる場合じゃないでしょう！」

丸尾の一言で全員は「ハッ……！」となった。

実は4人がそんなことをしているとき、敵MSは攻撃してこなかった。

そして、全員が周りを見た時、待ってましたと言わんばかりに撃ってきた。

全員避けて、反撃に出た。

丸尾「ズバリ！此処からいなくなれでしょう！」

みぎわ「なんなのよこいつら！」

ハルヒ「当たらなければ、どうってことないわ！」

キヨン「俺に触れるな！」

フェイト「はあああ……！」

花輪「これで終わりだよ、ベイビー」

丸尾はバズーカやビームライフル、ド・ダイ改を上手く使って

キョンはソードで斬りまくり

フェイトはバルディッシュを大剣にして豪快に斬り

ハルヒとみぎわはマシンガンやヒートホーク（みぎわはカーボンブレード）、ド・ダイ（ド・ダイはハルヒのみ）を上手く使って

花輪はバスターライフルをフルパワーで多数の敵を撃ち落とし

それぞれが、それぞれのやり方で敵を倒していく。

時間はかかったものの、全MSを倒した。

キョン「ふうー」

ハルヒ「私達の大勝利！」丸尾「ズバリ！生き残れたでしょう！」

フェイト「皆、その…」

フェイトが何か言おうとした時だった。

フェイト「うつ…」

フェイトが突然苦しみだした。

キョン「フェイトさん？」

花輪「どうしたんですか？」

するとフェイトは力無く落ちる。

その時、フェイトから『何か』が離れていって、海の中へ。

それをキョン達は気付かなかった。

ハルヒ「よつと!」

ハルヒはフェイトをキャッチした。

そのとき…

ハルヒ「ちよつと!?!?この人、血が出てる!」

キョン「なに!?!」

キョンたちは急いで、近くの病院へ飛んだ。(途中で道を尋ねながら)

~~~~~視点~~~~~

フェイトから離れ、海へ潜った『ソイツ』は泳いで別の所へ移動した。

そして、別の所でそれを誰かが水晶玉で見ていた。

?「ふふふ…いいわぁ このままエースオブエースやユーノ・スクライアの持つメダルのエネルギーを初めとする魔導師達のエネルギー

「も吸っちゃいなさい…勿論、デジモンのエネルギーも与えるわ…  
そしてアナタはより強く、超究極体になるのよ」

水晶玉を見ながら、その人間はうつすらと笑顔を浮かべて呟く。

ソイツは一体なんなのか？

目的は？

次回に続く！

## 戦闘くまる子篇

街で暴れだすデジモン、モビルスーツ、逃げ出す人々。

まる子達は茫然とそれを見ていた。

すると、二体のデジモンがやって来た。

コカトリモンとフアングモンだ。

コカトリモン「コケー！コッコッコ…」  
フアングモン「ガルルルル…」

言わずもがな、この二体はこちらを敵対している。

テリアモンとピヨモンは4人の前に出た。

テリアモン「つかさ達には手を出させないよ！ブレイジングファイアー！」

ピヨモン「マジカルファイアー！」

しかし、フアングモンは攻撃を避けてテリアモンを蹴り飛ばし、コカトリモンは受けても平気な顔をしている。

つかさ「テリアモン！」

みゆき「成長期のこちらは不利がありますね…」

みゆきは不安そうに呟く。

みゆき「何か打開策は…」

みゆきは考えた。

みゆき「これに何かヒントは…」

みゆきはデジヴァイスをいじった。

するとデジヴァイスの画面に使用説明が載っていた。

『このデジヴァイスには、3つの機能があります。

パートナーデジモンの進化、デジモンの収納、カードスキャン』

みゆきはカードスキャンという字に目を向けた。

『カードスキャンについて

カードスキャンというのはデジモンカードに内蔵されたアドレス（肉眼では確認出来ない、デジヴァイスを通してから見える）をデジヴァイスにスキャンさせる。

スキャンの方法はデジヴァイスの背についたレンズにアドレスを見せること。

以上がデジヴァイスの機能です。』

みゆき「カードスキャン…ですか」

みゆきは持っていたデジモンカード『カブテリモン』をスキャンした。

みゆき「カードスキャン！カブテリモン、メガブラスタ―！」

ピヨモン「メガブラスター！」

ピヨモンの放ったメガブラスターがコカトリモンに直撃した。

コカトリモン「クワー！？」

重たい一撃に何とか耐えたコカトリモン。

つかさ「ゆきちゃん、今のどうやって…」

みゆき「これはですね」

みゆきはつかさに、デジヴァイスについて手短に説明した。

つかさ「わかった！やってみる！」

そしてつかさはカード「ティラノモン」をスキャンした。

つかさ「カードスキャン！ティラノモン、ファイアーブレス」

テリアモン「ファイアーブレス！」

テリアモンのファイアーブレスはファングモンにあたった。

しかし、とどめにはならなかった。

コカトリモン「コケー！」

ファングモン「ガアアアア！」

ドス！バキッ！

テリアモン「うわー！」

ピヨモン「きゃー！」

みゆき「ピヨモン！」

つかさ「テリアモン！」

みゆきとつかさは思わず二匹に駆け寄る。

ピヨモン「来ちゃだめ……」

みゆき「ですが……」

テリアモン「こんなの……モーマンタイ……」

つかさ「テリアモン……」

つかさは泣きそうになる。

一方、まる子達は

まる子「たまちゃん……私達は離れてよっか……デジモンバトルの邪魔になりそうだし……」

とか言ってるが、つかさ達を置いてでも逃げたいと思っているまる子。

しかし……

ザク「……………」

サーペント「……………」

ジン「……………」

まる子が逃げようとした方向からモビルスーツのザク、サーペント、ジン三体も現れた。

絶体絶命である（キートン）

しかしそんな時だった。

トールギス「フッ！」

一体のトールギスが現れ、ビームサーベルで三体のMSを破壊した。

たまちゃん「だ、だれ？」

トールギス「大丈夫かい？さくらさん、穂波さん」

たまちゃん「その声は…野口さん！？」

まる子「えー！？」

トールギス「ピンポン、正解だよ…クックック」

なんと、トールギスは野口さんだった。

野口「2人が持つてる機械を見てみな」

機械を取り出すまる子とたまえ。

野口「それを起動させて、やりたい機体を選ぶと、その機体になれるよ…もつとも、なれる機体に限られているけれどね」

まる子とたまちゃんは実際にやってみた。  
すると…

たまちゃん「うわあああ！！」

まる子「ガンダムだよ！！」



まる子はストライクガンダム、たまちゃんさーjisガンダムになった。

野口「後はどうするのか？分かってくるだろう？」まる子「うん！これなら負けないよ！」

みゆきとつかさはまだ二匹に苦戦していた。

それでもピヨモンとテリアモンは立ち向かう。

みゆき「ピヨモン！」

つかさ「テリアモン！」

そんな時だった。

2人のデジヴァイスが光り出した。

その光はピヨモンとテリアモンへ

『ピヨモン進化！バードラモン！』

『テリアモン進化！ガルゴモン！』

進化した二匹はもはやファングモンとコカトリモンの敵ではなかった。

バードラモン「メテオウイング！」

ガルゴモン「ガトリングアーム！」

コカトリモン「グワァー！！！」

ファングモン「ガアアアア！」

二匹の技を前にファンゲモンとコカトリモンは断末魔を上げ消えた。

つかさ「やったー!」

まる子「ばんざーい!ばんざーい!」

勝利に喜ぶのも束の間、再びモビルスーツとデジモンが現れる。

野口「とりあえず、あいつらを倒しながら安全な場所へ行くよ!」

一同は敵の群れに突っ込む。

他の皆も同じようなことをしていた。

ハヤテとナギとみくる

ハヤテ「今だグラウモン!」

グラウモン「エキゾーストフレイム!」

みくる(ガンダムX)「ひえゝ来ないで下さい(泣)」

ナギ「キュウビモン!」

キュウビモン「鬼火玉!」

はまじ、関口、ブー太郎

はまじ(ガルバルディ)「ちくしょー!なんなんだよこいつら!」

関口「デジモンもいるし!」

ブー太郎「訳が分からないブー!」

永沢、藤木、小杉

永沢「まったく、今日はとことんついてないよ」

ガンダムサンドロック

藤木「本当だね」

サイベント

小杉「どうでもいいだろ！それより腹へった」

く大野、杉山く

シャイニングガンダム

大野「シャイニングフィンガー！」

ガンダムマックスター

杉山「今だ！こっちだ！」

大野と杉山は子供達をデジモンやMSから守っていた。

くとし子、上ヶ崎、笹山く

ガンダムアレックス

とし子「あつちへいってー！」

デュエルガンダム

上ヶ崎「もう最悪！」

ガンダムキコリオス

笹山「お家に帰りたーい！」

くくナーノ視点くく

ナーノは焦っていた。

ある恐ろしいものを一刻も早く消すために。

ナーノ「アイツが…成長しないうちに！」

ナーノ（未来の父さんの話が本当なら、今頃あの人たちも此処にいるはず…あの人達から力を借りよう！）

果たして、ナーノが倒そうとする物は一体…

く？視点く

ここはどこだ？

俺はアイツと戦って、アクシズを止めて…

だめだ…それ以上は思い出せない

ん？モビルスーツ！？

なんでこんなところに！？

妙な生き物もいるぞ！

どうやら、厄介な場所に来てしまったようだな…！

この人物は一体誰だろうか…次回へつづく（キートン）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0851x/>

---

ユーノ・スクライア外伝の外伝！

2011年12月25日21時47分発行